



第 48 回 「「わからない」という方法」の言葉

橋本治著「「わからない」という方法」(集英社新書、2001年4月)は評論家・随筆家である著者による示唆深い書籍です。著者は編み物にも才能を発揮し、独特な教則本を記した経験、また作家としての経験から含蓄のある意見を述べています。本書は20年前に出版されましたが、今読んでも内容は新鮮です。残念ながら著者は2019年に逝去されました。本書のカバーする話題は科学技術の分野とは異なりますが、理系の目から見てもご尤もと思われる記述がたくさんあります。以下にそれらを列挙しましょう。

著者はまず20世紀は「わかる」が当然の時代だったと指摘しています。当時の人たちはどこかに「正解」があるので書物を読み漁り、いち早く「先端の理論」を学ぶ努力をしたそうです。すなわち自分の知らない正解がどこかにはあるはずと思い込んでいたそうですが、著者はこれを20世紀病と断じています。一方21世紀は「わからない」をスタート地点とする時代なので、「バカといわれることを顧みない度胸」だけが20世紀病に侵された日本社会の膠着を突破できるのだそうです。このことは本書が出版された21世紀初頭のみでなく、現在でもあてはまりそうですね。さらにこれは科学技術への警鐘ともとらえることができます。例えば従来の on-shell 科学に立脚した光科学技術は膠着して久しいのですが、これを突破するには上記の度胸が必要です。

次に著者は「へん」ということについて述べています。すなわち「自分はへんではない」という立場にたつと「へん」という反対側の立場の持つ意味が見えなくなり、「へんなものだから無視してよい」で終わってしまうそうです。光科学技術は膠着しているにもかかわらず、新しい提案が出されると「そんなアイデアなんてどうでもよい」と口走る研究者がいます。また、「なんてへんなことを研究しているのだ。」、さらには「光とは何かということを教えてやる。」などと言い切った大御所もいます*。この人が教えてくれる光の描像は20世紀の on-shell 科学の研究の成果であり、21世紀の現在では通用しなくなっているはずなのですが。

「自分はへんではない」という理由だけで、「へん」というもう一つの立場を排除してしまうことがあるそうです。その結果「自分は正しい」という視点のみになって、自分自身を見つめなおすための視点をなくしてしまいます。それは「自己批判」という客観性を確保できなくなるということで、その結果たやすく膠着へと傾き、立て直しができなくなるのだそうです。光科学技術でいえば従来からある on-shell 科学を「へんではない」と考えることで、その膠着を打破する視点をなくしてしまったといえましょう。

上記のように20世紀は「正解がある」と信じられていた時代なので、学習して正解を理解したと信じる人たちが知識人となっているそうです。「わからない」と思って、自分独自の思考法で物事を考える人はこれらの知識人から怒られるか、へんな顔をされます。それは神聖なる「正解」の有効性を信じるこれら知識人にとって不真面目で許しがたい不愉快な行為だからです。たとえば従来からある on-shell 科学をたよりに光学現象を理解している人たちは光と物質の「相互作用」という現象を理解したと信じているかもしれません。しかしそれは極めて近似的な摂動の方法に基づいた理解です。しかしこれを指摘すると、多くの人たちは不

愉快で許しがたく思うようです。

自分がわかると思うことだけを拾い集めて、それらしいものを作り上げても、それは似て非なるものへ至る達成なのだそうです。上記の「相互作用」についての理論を作り上げるとき、摂動法などの既存の方法をいくら拾い集め組み合わせても真の達成には至りません。off-shell 科学の研究が始まったのは、on-shell 科学とは補完的で全く別の方向から真の達成を目指すためなのです。

たとえ時間がかかっても、「自分のやるべきことは何か」を理解した後にこの理解に裏打ちされた啓蒙活動をすれば後進の人たちも深く理解します。膠着を打破する研究を発展させるにはこのような啓蒙活動が重要です。ここで本書では重要な警鐘を鳴らしています。すなわち例えば著者の関わった「編み物」において、ノウハウに「生き方の強制」を含める教師がいると、生徒はうっとうしがり去ってしまうそうです。光科学技術の研究においても、第一人者を任ずる研究者が、自分の従事している研究が一番優れていると思ひ弟子にそれを強制するのみでなく、さらに生き方も強制している例がありました。これをうっとうしく思い去っていった心ある弟子が何人かいたことを思い出します。

(*)大津元一、「ドレスト光子はやわかり」(丸善プラネット、2014年3月) p63.
